

鈴木健次郎校長離任演説

(昭和四十二年(一九六七年)四月十日(月))

四年間、諸君とともに、秋高の新しい発展のために努めて参りました。

私は、よくその間に中心校ということを示したのであります。中心校とは、何も秋田県を中心に所在するからというのではないのであります。また、諸君のエリート意識を強調した訳でもないのであります。本校の長い歴史と伝統が、本校に期待する社会的要請を述べたのであります。

今、高等学校の教育が当面しておる、学力の向上、あるいはまた、スポーツの振興、あるいはまた、日常生活の正しさ、そういうものに対して、秋高がその中心となつて、その先達となつて、あらゆる問題を解決するために秋高の役割を強調して参つたのであります。

秋高は、古い伝統を持つているのであります。しかし、伝統が古いとか、歴史が長いとか、あるいは設備がいいとか、そういうことは、必ずしもいい学校の条件ではありません。生徒の一人一人の生徒が、学業の生活に対して、スポーツの生活に対して、また日常生活について、どのような積極的姿勢を持つているかどうかによって、いい学校であるかどうかということが決定するのであります。

そういう意味において、私は、常に、諸君に、自覚ある、そしてまた、厳しい毎日毎日の鍛錬の生活を要請して参りました。そういう意味において、私は、いい学校であるために、一人一人の生徒諸君の心構えを強調して参つたのであります。

スポーツと学業の両立ということは、きわめて困難なことであります。私も、それを十分承知いたしておりますけれども、なお、スポーツと学業の両立を強調したのであります。生徒の一人一人が、この目標に向かって、何ものにもくじけない信念を持つて、何ものにもくじけない意志を持つて、何物かを創造する力を、生徒諸君に期待したのであります。

私は、これからの諸君に望みたいことは、今の民主主義というものは、とすれば、外部の権力に対する抵抗として考えられますけれども、本当の民主主義とは、自らの内心にある邪念・欲望に打ち克つことでもあります。その自らの内心にある邪念・欲望に打ち克つてはじめて、本当の意味の民主主義というものが確立されるのであります。そういう意味において、これからも、生徒諸君は、一人一人、自らの邪念・欲望に克つて、皆と協力のできる学園を作つていただきたいと思つたのであります。

私は秋高を愛する、それが故にまた再びここに、諸君に入学式に際して述べた同じ言葉を繰り返して、お別れの言葉にいたしたい。

「汝何の為に其処に在り也」、「この言葉にはっきり断言のできる生徒一人一人の毎日の生活であつて欲しいのであります。

私は秋高を愛する、それ故に私は、諸君の一人一人の努力によって、秋高が今後益々発展することを、心から祈願するものであります。